

長期不登校経験のある生徒に対する社会参加支援

—自己イメージと時間的展望の視点から—

15006PCM 金子 未来

問題

1. 長期化する不登校

文部科学省の平成 27 年度不登校児童生徒への支援に関する中間報告では「不登校児童生徒数が高い水準で推移するなど、憂慮すべき状況である」と述べられるなど、不登校問題は深刻化しており、特に長期化した不登校生徒については、ひきこもりやニートへ移行するとされ(秋山, 2007), 社会参加の困難さがうかがえる。

杉山(2007, 2009)は、長期化する不登校生徒の背景病理として、①統合失調症を中心とする精神病, ②スキゾイドパーソナリティの low function を中心とするパーソナリティ障害(前思春期まではアタッチメント障害, 以下 AD), ③自閉症(以下 ASD)をベースとした対人関係での傷つきによるフラッシュバックの3つを挙げている。先行研究では、症状レベルではなく個々の内的体験やその中核にある自己イメージに着目することで、鑑別が可能になると考えられている(花田:2012, 早川:2013)。また高塚(2004)は、不登校生徒は将来像を描くことができない状態、時間的展望が持てない状態になっていると指摘している。

2. 時間的展望の概念と測定法

時間的展望とは、最も一般的に言えば「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来および心理学的過去の見解の総体」(Lewin, 1951)と定義される。白井(1994)は時間的展望を、希望、目標指向性、充実感、過去受容の4つの側面から捉え、時間的展望体験尺度を作成した。一方で、時間的展望を将来展望や目標の明確化、将来への肯定的展望、不安・混乱感という3つの観点から捉えた研究や(山本:2011)、時間的展望を、将来への希望、将来志向、空虚感、計画性、将来目標の渴望という5つの観点から捉えた研究も存在する(都築:

2010)。時間的展望をいかにして捉えるか、試行錯誤されている。また投影的手法で時間的展望を捉えた研究も存在し、その有効性も述べられている。佐藤・岡本(2010)によれば、個人の時間的展望は、はっきり自覚されるものではなく、ぼんやりとしたイメージとして体験されると考えられ、より無意識的な部分を測定することが可能な投影的手法が適当であると述べている。

本研究では、個人の無意識的な部分へのアプローチが可能であることと、語られた物語から自己イメージや内的体験を明らかにできる、という利点を考え、投影法である主題統覚検査(以下、TAT)を用いて時間的展望を捉えることを試みる。

目的

自己イメージと時間的展望の開かれ方には相互作用があるという仮説を実証し、その過程において得られた所見から、長期化した不登校生徒の社会参加支援策を検討する。

方法

1. 調査協力者

不登校生徒を対象とした中高一貫校である S 学園の、高校 3 年生の男子生徒 6 名の協力を得た。それぞれが社会参加を目の前にひかえるこの時期の進路として、4 年生大学進学希望が 2 名、専門学校への進学希望が 3 名、就職希望が 1 名、自宅の家業の手伝いを考えるものが 1 名であった。

2. 調査内容

成育歴や学園での様子、学園で行われたアンケートなどをもとに事例の概要を把握した。心理検査として、バウム・テスト、ロールシャハ・テスト、TAT を実施した。筆者のほか、他の大学院生や臨床心理士が実施した心理検査も含めて検討素材とした。

TATは、マレー版の図版6枚(#1, #2, #3BM, #12BG, #14, #16)を使用した。時間的展望を客観的に捉えるため①将来の具体性, ②将来への希望, ③将来への不安, ④過去のネガティブな体験, ⑤過去受容, ⑥充実感, ⑦現実性という7つの指標について、5件法によって高低を評定した。その際、筆者と臨床心理学領域の大学院生の2人で協議し評定値を決定した。

結果と考察

1. TATにみられる時間的展望の特徴

将来や過去が感情を伴った言葉で語られていないことが共通する特徴として見られた。不登校生徒たちは、過去に対するネガティブな感情を持ちつつも、それを自分の一部として受け入れることができていないと考えられる。また、未来に関して希望を持つこと、自己内に不安や葛藤を抱えること、それらを言語化して表現することなどに、困難を抱えることが指摘できる。

2. 総合考察

自己イメージと時間的展望には相互作用が認められ、仮説は支持されたといえる。全事例において共通している時間的展望の特徴は、リアリティのある未来を持つことの難しさである。現実的な自己イメージがないため、リアリティのある未来を持っていないことが考えられる。そのため、社会参加への不安を抱えている。社会参加を目前にした生徒たちの自己イメージは①拡散している場合、②委縮している場合、③肥大化している場合の3パターンが考えられた。3つの自己イメージから考えられる社会参加不安の背景として、以下のことが考えられる。①の場合は存在感の薄さが関連しており、自分のことがわからない感覚を持っている。この感覚が、社会参加不安につながっている。②の場合は自己効力感が薄く、自己否定的であるため、社会に出て活躍できる自分を想像できない。そのことが、社会参加に対する恐怖を感じさせる。③の場合、自己断片化回避のため自己イメージが肥大化している。やればできるという気持ちの裏側には、自信のなさが隠れている。肥大化した自己が壊れ、バラバラになってしまう不安を抱えている。現実的な時間的展望を持つために

は、社会参加ができて自分のイメージを持つことが必要である。社会参加不安の背景に基づき、自己イメージ生成の観点から支援策を検討した。

3. 考えられる支援

①自己イメージが拡散している場合

事例1(4年生大学進学希望)は傷ついた不安定な自己イメージを持っており、まとまったひとりの人間になり切れていない。事例2(就職希望)は無力感を抱え、人間ではないバラバラの自己イメージになっていた。このような、傷つきを抱え拡散した自己イメージを持つ生徒への支援として、身体性と情緒性の獲得が考えられる。身体感覚を持つことで情緒を受け入れる基盤が構築され、自己にまとまりを感じられるようになるだろう。

②自己イメージが委縮している場合

事例3(4年生大学進学希望)は自分が漏れてしまう不安が強く、無力な自己イメージを持っている。事例6(自営の家業の手伝い)は、環境に支配され委縮してしまった自己イメージを抱えている。この2事例に対する支援策としては、現在の自己イメージの明確化を目指すべきであろう。現在の生活において、実現できている肯定的な自己を実感することで、自己効力感を回復することができる。

③自己イメージが肥大化している場合

事例4(専門学校進学希望)は自身の空想上での自己イメージと、現実的な自己との間に大きな差があった。事例5(専門学校進学希望)は無理して自信を持つことで、肥大化した自己を支えている。このような場合、なりたいたい自分となり得る自己の統合を目指す必要がある。理想のみを思い描くのではなく、現実的な視点を持ち、理想と現実の差を知り、受け入れ、すり合わせていく作業をしていかなければならない。

4. 今後の課題

時間的展望の指標判定に課題が残った。指標判定を用いると、言葉で表現されたことのみが対象になってしまうため、語られなかったことについては判定できないという問題点がある。